

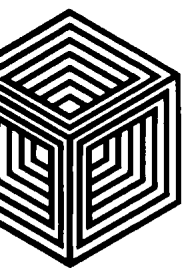
孤立無援の思想

高橋和巳

全エッセイ集



# 孤立無援の思想



高橋和巳・全エッセイ集・河出書房新社

〔著書〕

|             |              |      |       |
|-------------|--------------|------|-------|
| 李 商 隱       | (中国詩人選集)     | 1958 | 岩波書店  |
| 王 士 禛       | (中国詩人選集)     | 1962 | 岩波書店  |
| 悲 の 器       | (文芸賞長篇部門当選作) | 1962 | 河出書房  |
| 文 学 の 責 任   | (評論集)        | 1963 | 河出書房  |
| 憂 鬱 な る 党 派 | (書き下ろし長篇小説)  | 1965 | 河出書房  |
| 邪 宗 門       | (長篇小説)       | 1966 | 河出書房  |
| 散 華         | (作品集)        | 1967 | 河出書房  |
| 新 し き 長 城   | (評論集)        | 1967 | 河出書房  |
| 我が心は石にあらず   | (長篇小説)       | 1967 | 新 潮 社 |
| 捨 子 物 語     | (長篇小説)       | 1968 | 河出書房  |

孤立無援の思想

定価はカバーにあります

昭和四十一年五月十月初版発行  
昭和五十五年五月三十日三十五版発行

著 者 高 橋 和 巳<sup>たか ばし かつみ</sup>

発行者 清 水 勝<sup>しみず かつ</sup>

印刷者 多 田 基<sup>ただ だき</sup>

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二一二  
振替 東京 〇一〇八〇二  
電話 東京 営業(四〇四)一二〇一  
編集(四〇四)八六一

## 孤立無援の思想 目次

### 第一部 革命と戦争の世代……………九

失明の階層——中間階級論……………一二

孤立無援の思想……………一六

順逆不二の論理——北一輝……………一八

戦争論……………一九

散華の世代——往復書簡……………一〇五

戦後民主主義の立脚点……………一二

焼身自殺論……………一八

見る悪魔……………二三

### 第二部 文学は何をなしうるか……………一三

戦争文学序説——運命について……………一三

戦後文学私論……………一四

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 政治と文学……………                  | 一四 |
| 〈性〉的素材主義批判……………             | 一七 |
| 忍耐の思想——武田泰淳……………            | 一八 |
| 日常への回帰——椎名麟三……………           | 二五 |
| 現代の地獄——野間宏……………             | 三七 |
| 仮面の美学——三島由紀夫……………           | 三八 |
| 苦しむ才能——井上光晴……………            | 三九 |
| 無常の視線——深沢七郎……………            | 四〇 |
| 自己権力と自己無化——埴谷雄高……………        | 四九 |
| <b>第三部 多岐な精神領域への志向……………</b> | 五二 |
| 東風と西風……………                  | 五三 |
| 東西対抗史観の問題……………              | 五五 |
| アジア主義……………                  | 五七 |
| ヘーゲルとの対決……………               | 五九 |
| 思想家としての岡倉天心……………            | 六九 |
| 夏目漱石における近代……………             | 七五 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 詩と風土          | 六四  |
| 孤独なる遊戯        | 元一  |
| みやびと野暮        | 元二  |
| キリスト教の投影      | 元三  |
| 文学者にみる視野脱落    | 元七  |
| 文人相軽          | 元九  |
| 文学と友情         | 三〇一 |
| 文学と季節         | 三〇四 |
| 自然への讃歌と挽歌     | 三〇七 |
| 孤独なる遊戯        | 三〇八 |
| 小さな野心         | 三二〇 |
| 私の小説作法        | 三二一 |
| 〈志〉ある文学       | 三二三 |
| 長篇の功罪         | 三二五 |
| 二つの「飛翔」       | 三二七 |
| 投稿について        | 三二九 |
| 京都の文学青年達      | 三三一 |
| 『近代文学』終刊号を読んで | 三三四 |

|               |    |
|---------------|----|
| 書庫なき紙魚        | 三六 |
| 書物と驢馬         | 三七 |
| 読書のかたち        | 三八 |
| 未だ形なき新しい読書    | 三九 |
| 精神の網          | 四〇 |
| イメージをはぐくむ     | 四一 |
| 私の読書遍歴        | 四二 |
| 中国のこころ        | 四三 |
| 中国古典の翻訳ブーム    | 四四 |
| 詩と隠遁          | 四五 |
| 陶淵明について——学会報告 | 四六 |
| 詞華集の意味        | 四七 |
| 『紅樓夢』の背景      | 四八 |
| 詩人魯迅          | 四九 |
| 中国知識人と日本——郭沫若 | 五〇 |
| 新中国の長篇小説      | 五一 |
| 協同研究について      | 五二 |
| 詩人の逸話         | 五三 |

第四部 水清ければ魚棲まず……………三三

他山の石——テレビ・ドラマ擁護……………三三

兎と亀——日和佐風土記……………三二

醉生夢死のたのしみ……………三八

病中悲哀……………三八

酒と雪と病い……………三九

苦痛について……………三九

愚昧への道……………三九

災害の夕……………三九

睡りのかたち……………三九

質問の力について……………四一

教師失格……………四二

我が宗教観……………四四

少年期断片……………四六

私の中学時代……………四六

春のうた……………四一〇

優しき皮肉……………四一一

|         |    |
|---------|----|
| ボヘミアン礼讃 | 四二 |
| 女性の自立   | 四三 |
| 女と蝴蝶    | 四四 |
| 非暴力     | 四六 |
| バベルの塔   | 四七 |
| 漬物の味    | 四九 |
| 遊びの法則   | 五〇 |
| 悪の進化    | 五〇 |
| 醜い裸     | 五一 |
| 勲章と千人針  | 五三 |
| 鳥と遭難    | 五三 |
| お屠蘇考    | 五三 |

装幀 広瀬 郁

# 孤立無援の思想



# 第一部 革命と戦争の世代



## 失明の階層——中間階級論

### 1

その人生のなかばに、正しい道をふみあやまり、ほの暗い森の中にみずからを見出した「神曲」の詩人ダンテは、ものすさまじい想像力によって、罪と試練と許しとの三つの架空の伽藍<sup>がらん</sup>を構築したとき、その発端、地獄の門前に、地獄からも拒まれつづける最も悲惨な人々をおいた。絶望の門にすらも入れぬゆえに、永遠に救済される望みもたたれた人々のミゼールを。

そこには、苦悶の言葉、怒りの調子、そして昂低するどよめきが満ち、それらがあたかも旋風にもあそばれる砂塵のように暗黒の空にただよう。まだ遍歴のはじまりにすぎない詩人は恐怖にうなだれつつ、案内者ウィルジリオに問う。

「師よ、わが聞くところのものは何ぞや。苦しみによりてかくも打ちひしがれたりを見ゆるは、いかなるものなりしや」

案内者は言う。

「このあさましき有様におかるるは、譏<sup>うそ</sup>りをも誉れをもうけずして世をすごせし人々の悲しき魂なり。彼らにまじれるは神にそむきしにもあらず神に忠なりしにもあらずして、ただ己れみずからのためにのみ生きたりしところの天使たちのいやしき群れなり」

注釈によれば、この句はヨハネ黙示録の一節を典故にもち、悪魔の王ルチイフェロが神にそむいた時、中立的態度を持してその戦いのどちらにも荷担しなかった罪の報いをうけているのだという。「熱くもあらず冷やかにもあざざる」ゆえに吐きいだされて見捨てられ、またその中立的態度ゆえに天国からも地獄からも拒まれつづけねばならないのだという。

案内者はつづけて言う。

「これらの人々には死にゆくことの望みもなし。しかしてこの失明の中に生きることのいやしさは、彼らをしていかなる他の宿命をも羨ましむるなり。世は彼らの名のつたえらるるを許さず、慈悲にも正義にも彼らは軽んぜらる。わ

れらもまた彼らにつきて言うことを止めん。汝ただ見てすぎよ」と。

神と悪魔との苛酷な対峙を世界の原基的構図としてえがくキリスト教的精神ないしはゾロアスター教的単純化は、悪魔性にはむしろ、それが神の恩寵を逆証明するゆえにその存在の場所をあたえるが、そのどちらでもないものには有るべき位置をすら拒む発想がつよく支配している。歴史がしめす多くの悲惨と殺戮のほかに、じつは「汝ただ見てすぎよ」と見捨てられた多くの記録されざる精神的悲惨が存在する。そしておそらくは烈しく階級の対立する二十世紀にも、その〈動〉かしからずんば〈反〉かの構図は、なお決定的な支配力をもって継承されている。

「キリスト教的価値判断はいたるところ社会主義的体系や実証主義的体系のうちに残存している」と、ニイチェははやく「権力への意志」のなかで看破したが、社会主義が科学的社会主義の形態をととのえて後も、その発想の基礎に原始キリスト教的メシヤの意識がみてとれることは、すでに多くの人々の指摘するところである。その神と悪魔との対峙についてもまた同様である。

たとえばラードブルッフはこう言っている。

「資本はだまされた悪魔のように自分のためになるつもりでやっていることのすべてによって、社会主義に奉仕せざるをえないことになるのであり、労働者もまた自分の階級のために闘っているつもりでいながら、知らずして階級なき社会のために闘っていることになる」(「社会主義の文化理論」)と。

プロレタリアートにたいして賦与された使命、そしてマルクス主義のふくむ究極的オブティミズムによって、その敵対者にも賦与された弁証法的意義づけから——しかしこぼれ落ちた一群の人々が、あたかもダンテによって悲しみの街の入口に永遠に放置された天使たちのように、この現在にもいるのである。それはレーニンが革命の具体的条件としておもひ描いた、支配者層の徹底的墮落、前衛的党派に指導されたプロレタリアートの団結のつぎに付け加えられた、すくなくとも好意的中立あるいは非行動をたもつ中間層——がそれである。中間層がはたしている文化的役割は大きいが、彼らは二十世紀においても理念的使命感の賦与からとり残された。プチブル根性や日和見主義は、しばしば、革命党派内ではブルジョアのむきだし<sup>ひきだし</sup>の悪よりも、それがもつ内面性によってより烈しく糾弾され非難される。

ブチブルの上層部や中間層のエリートたちは、〈進歩の観念〉をもつことができた。プロテスタンティズムは日々の精進と進歩の観念とを結合して中間層のひとつの救いを形成する大きな役割をはたした。合理主義、科学精神が彼らの徽章であり、それが政治的にもブチブル急進主義としてある役割をはたすことができた。

しかしそれは、無数にある職業のうち、自己の創意を何らかのかたちで職務に生かすことによって進歩の観念が虚妄ではないことを実感しうる、自由業を中心とする少数の選ばれた人々にかぎられる。彼らは社会を動かす経済力や党派性はもたなかったが、教育や文化の面ではたしかに積極的な役割をはたした。しかし、彼らの進歩は、知的な淘汰を前提にするものであったために、必然的に非エリート層とのあいだに大きな断層をうんだ。

その断層は、エリート層が指導する理念社会としての学校とりわけ大学と、利害社会としての一般世間との、一種の断絶として象徴的にあらわれる。単に学生運動家ばかりではなく、すべての学生たちは、学園から社会にむけて一步をふみだす際に、すでに一つの躓きをよぎなくされる。少数の恵まれた人々をのぞいて、学生たちは、自分が学んできた進歩の観念を検証すべき場がどこにもないことを痛

切に思い知らされ、次に理念か生活かのどちらかが決定的に間違っているのだという不幸な疑問にとりつかれる。しばらくの間は、自由であった学園への回顧と理念への執着によって、現実を侮蔑し、やがて生きてゆくために、強行軍をする兵士たちが、不必要な一切の重荷をすて、最後には愛人の写真をも棄てるように、さまざまな知識や思想、そして進歩の観念をもすてさるのである。

かくてより多くの下層中間階級や非エリート層は、みずからの恩寵の観念をもつことができず、時になす突発的行動もじつは拒まれた地獄の門にむりじいに入ろうとする衝動のようなものにすぎず、そして平静にもどれば結局は地獄からも拒まれ、それゆえに永遠に天国へは至りえないみずからを発見せねばならなかったのである。

そのとり残された人々、つまりは大部分の農民、全企業の五十九%をしめる零細企業者、大部分の女性、下級の公務員や形ばかりのホワイト・カラー、未組織の賃金労働者など、全人口中の圧倒的多数者の唯一のよりどころは、ひたすら己れみずからのことを思いまどうエゴイズムであり、そして〈進歩の観念〉でさえかならずしも処理できなかった「日の下になに一つ新しきことなき」日常性だったのである。譏りをも誉れをもうけない日常性、絶望的困窮

というほどでもないが何も変りばえのない日々の生活。意義なき出勤と労働と、そして自分のミゼールから一時的に目をそらさんがための娯楽と気ばらし。モーパッサンは平凡な女の一生をひとつの長篇小説で追求したあげくに「人間の一生というものは、誰もが思っているほどよくもなく悪くもないものです」と結論したけれども、退職金がさきに計算できてしまうようにその結論がはじめから目に見える階層は、では何をよりどころにすればよいのかは解答しなかった。

## 2

善悪のはげしい葛藤によって世界は形成され、また流動するという認定は、もともと東洋にはなかった考え方だった。

原始仏教は善悪の対比のほかに、つねに〈不善不悪〉に一定の意味をみとめていた。在家の信徒こそ尊重さるべきであることを忘れないかぎり、仏教はむしろ不善不悪なる人々のための倫理であり教義であった。善男善女という言葉が真に意味している観念は、自己の正義のために他の正義をたたきのめす存在を意味するのではなく、百八煩惱に思いまどいつつ、やがて涅槃に在るべき凡人をさしていた

のである。しかしそうした教義も社会の矛盾や国家間の対立が激化するとき、浄土門の教義や日蓮宗の闘争がそれをしめすように、両極へと併合されていき、「善人なおもちて往生す、いわんや悪人をや」という屈折した命題や、他宗派への徹底的折伏という形態をとり、不善不悪の立場は救済論の対象から忘れさられていくのである。さらに近代においては、とりわけ日本の明治維新らしいの国をあげての欧化の波のなかでは、そうした仏教的兩極化すらなお微温的なものとして、新たに輸入されたキリスト教的世界観とその反逆的私生児である進化論やマルクス主義などの強弱あい争う世界観に圧倒されていった。異なった文化がはげしく接触する歴史的時間は、全く新たな思想や制度の登場しうる一つの機会だったが、それは残念ながら、従来存在した朱子学と禅宗に代表される上層意識と、日蓮宗から念仏宗にいたる下層意識との二重構造に、今ひとつあらたな上位観念をつけ加えることに終った。日本の社会には善悪葛藤の敗者を心情的に救う最下部がいまも存在するのだが、理念的には新たな世界観に圧倒されつくしたまま、何らかの社会的価値として、それが表面にあらわれることはほとんどない。

中間層で、もっとも大きな文化的政治的役割をあたえら